

秋山幸子作 「中間テスト」

- 効果音 (終業のベル)
- 先生 じゃ来週から中間テストが始まるから、みんなしっかり勉強するように。高校2年の時の成績は、内申書に大きく影響するから特に頑張るように。なお、クラブ活動に所属している者は、今週からテスト期間中にかけて、活動は一時停止になるからそのつもりで。では、今日はこれまで。
- 中川淳一 ちえ、つまらないな。来週から中間テストだなんて。これでおれも2週間、地獄の生活だな。それにしても、テストのためにクラブ活動が停止になるなんて、とてもおれには耐えられない。
- ナレーション 中川淳一は高校2年生。彼の学校では、来週から中間テストが始まることになっています。そして、テスト1週間前からテスト期間中は、クラブ活動は停止という規則になっています。彼は高校入学以来、野球部の部員として、毎日熱心に練習に励んでいる一人でした。高校生活にも慣れ、部員としての活躍も目覚ましく、目下、彼の高校生活は、野球がすべてと言ってもよかったです。一人でふさぎ込んでいる淳一のところに近づいてきたのは、クラスメートの宮崎さんと三浦君でした。
- 宮崎恵子 中川君、何一人でふさぎ込んでるの？ いつもの中川君らしくないじゃないの。
- 淳一 別に。ただ来週から中間テストが始まるだろう？ 今日から2週間もテスト勉強中心の生活を送らなければならないと思ったら、うんざりしちゃったのさ。
- 恵子 あら、そんなこと。でも、そうは言っても仕方ないんじゃない？ 高校生活にテストは付き物でしょう？ テストが好きな人なんてどこにもいないでしょうけど、高校生である以上、勉強するほかないんじゃない？
- 淳一 でもおれは勉強する気にはなれないよ。高校に入るためにせつせと勉強して、やっとの思いでそれを乗り越えたというのに、今度は定期テスト。これじゃなんのための高校生活かわかりやしない。それよりもおれは、二度とない高校生活を、野球というおれなりの生きがいを通して、フルにエンジョイしたいんだ。
- 恵子 野球もいいけど、それじゃ内申書はどうするつもりなの？ わたしたちはまだ高校2年だから、そんなに焦りはないけれど、来年3年になって進路を決定する際に、内申書が悪かったらきっと困ると思うわ。
- 淳一 おれはそういうふうに、“テストだ、内申書だ”と意識するのがたまらないくイヤなんだ。まだ若いんだ。自分の好きなことをやって、もっと自由に生きたいよ。
- ナレーション 話しているうちに淳一は、自分と宮崎さんや三浦君とのテストに対する意識のあまりの違いに、自分一人取り残された気分になってしまいました。
- 淳一(モノローグ) クラスのほかのやつも、みんなあんなふう考えているのだろうか？
- ナレーション こんな疑問を心に抱いたまま、だれもないグラウンドを横目で見つめながら、淳一は一人家路をたどりました。
- 効果音 (玄関の開く音)
- 淳一 ただいま。
- 母 あら、淳一。今日はずいぶん帰りが早いじゃないの。野球の練習はどうしたの？

淳一 来週から中間テストが始まるから、今日から部活動はないんだ。

母 そうだったの。でも来週からテストじゃ大変じゃないの。

淳一 別に。大したことないさ。

母 「別に」ってお前、普段「野球だ、野球だ」と毎日練習に明け暮れていて、ろくにその日の勉強もついていけない状態で、中間テスト1週間前になってもノンビリ落ち着いているのは、一体どういう訳なの？

淳一 勉強なんて、そんな目の色変えてやるもんじゃないさ。それに、テスト1週間前になって今更じたばたしても、どうにもなるわけじゃないし。

母 まあ、この子ったらあきれた子だわ。淳一は来年はもう3年生でしょう？ 1年後には大学受験を控えているのよ。今からその準備をしておかないと、その時に慌てても間に合わなくなるわよ。

淳一 うるさいな。もうほうっておいてくれよ。おれはまだ高2なんだし、来年のことは来年考えるさ。

効果音 (階段を駆け上る。ドアを強く閉める)

ナレーション 母とも意見の食い違った淳一は、その場を逃れるように、素早く2階にある自分の部屋に駆け込みました。

淳一(モノローグ) まったく、だれもおれの気持ちを分かってくれない。中間テストがなんだ。内申書がなんだ。大学受験がなんだ。テストなんかあるから、最近の高校生は、逃行に走ったり、自殺したりするんだ。テストなんか、この世から消え去ってしまえばいいんだ。

ナレーション 中間テストを来週に控え、淳一は一人心中で、こう思いました。次の日、学校で――。

効果音 (生徒同士の朝のあいさつ)

恵子 中川君、おはよう。昨日の悩みは解消した？

淳一 いや…。

恵子 あら、まだクヨクヨと考えてるの？ 中間テストはもう来週なんだから、今更中間テストの意義について考えてもどうにもならないんじゃないの？ ほかの運動部の人たち、頭を切り替えて猛勉強を始めてるわよ。中川君もノンビリしていると取り残されてしまうわよ。

ナレーション 恵子の言葉に、淳一は焦りを覚えました。その日の放課後、淳一は一人でだれも走る姿のないグラウンドをぼんやりと見つめていました。

淳一(モノローグ) ああ、グラウンドを走り回りたい。バットが振りしたい。2週間も練習しなかったら体がなまってしまふ。

ナレーション そんなことを考えている淳一のもとに、彼のクラスメートの山口孝夫がやってきました。彼は卓球部員で、クリスチャンでした。

孝夫 中川、こんなところで一人でぼんやりして、一体どうしたんだ？

淳一 ああ、山口か。別に。ただ、ここしばらくマウンドともおさらばかと思うと、なんだか寂しくて。

孝夫 僕もそうだ。10日以上もラケットを握らなかったら、感覚が鈍ってくるよ。でも中間テストがあるんじゃない仕方ないな。

淳一 山口はよくそう割りきれるな。おれは、中間テストのためにクラブ活動が停止になるなんて耐えられないよ。みんな「テスト、テスト」と目の色を変えて試験勉強しているけど、おれにはとても理解できない。小学生じゃあるまいし、上からいちいち「テスト、テスト」と言われて勉強させられるのは、もうコリゴリだ。一体テストなんてなんのためにあるのかなあ。

孝夫 確かに君の言うとおりかもしれない。でも、好き嫌いは別として、まだ高校生の僕らにとって、勉強するということはとても大切なことだと思わないかい？

淳一 なぜ？

孝夫 考えてもみろよ。今こうして僕らが互いに高校生としていろいろなことが語り合えるのも、小学校からの長年の勉強の積み重ねがあったからじゃないのか？ 今まで学ぶことをしてこなかったら、物事を考える思考力なんて身に着かなかったんじゃないのかな。

淳一 まあね。でも…。

孝夫 そう考えてくると、今僕らが学んでいることは、今の段階では確かに一教科、一教科別個のものかもしれない。でも、5年、10年先に、これらのものが自分自身の中で一つに結集された時は、それはすばらしいと思うんだ。つまり、学問は人格形成に大きく役立つってことさ。

淳一 悟ったようなこと言うなよ。学校で授業を受けるだけならいいよ。でも、どうしてテストなんかあるのかな。なんだか最近のおれは、テストのせいで性格までゆがんできたような気がする。

孝夫 オーバーだよ。それはきっと中川のテストに対する考え方に問題があるんじゃないのか？

淳一 一体どういふふうに？

孝夫 テストとは本来、今まで学んできた事柄が、一体どこまで自分のものとして身に着いているかを知る、一種の目安みたいなものだと思はる。決していい成績を取るためのものじゃないと思う。点が良ければ、それまでの知識が身に着いたということだし、仮に点が悪くても、努力が足りなかったと反省して、時間頑張ればそれでいいんじゃないのかな。僕らをつくってくださった神様は、決して無理なことは要求なさらないと思うよ。

淳一 なんだい、その神様っていうのは？

孝夫 うん。実は僕はクリスチャンなんだ。神を信じる以前、僕は今の君のようだった。なんて訳なしに、すべてが不満だらけだった。でも、神様を信じてから僕のその不満は解消した。

淳一 へえー。どんなふうに？

孝夫 神様は、僕たち人間をすべて異なるように創造された。一人一人性格が違うように。と同時に、神様から与えられた能力も、人それぞれ異なってくると思う。でも、それは神様のご計画があつてのことさ。神様が望んでおられるのは、それぞれに分に応じて与えられた能力をいかに生かしきるかということなんだよ。すべてのことをご存じの神様の前に、ありのままの自分を任せきった時から、僕の心は、平安と感謝の気持ちでいっぱいになったんだ。

淳一 へえー。じゃ山口はテストをどう考えてるのさ。

孝夫 うん。その能力を出しきってみるための、神様から与えられた一つのチャンスだと思ってる。

淳一(モノローグ) 神からの… チャンス…。どうしたらそんな考え方ができるんだろう。

ナレーション 淳一は大きく息を吸い込んで考えこみました。なんだかぼんやりとでしたが、今まで考えたこともないような次元の違う世界が、目の前に開けてきたような気がしました。

淳一(モノローグ) 神の…、計画か。

ナレーション 淳一は、確信に満ちた山口君の横顔を思い浮かべながら、そうつぶやいたのでした――。

<完>